

現代生活と自我に就いて

廣 兼 圓 澄

『好景氣』『騰貴』『暴落』『不景氣』『上人氣』『不人氣』恁うした走馬燈のように、猫の眼のように刻々に變化する文字に對して人々は過度に鋭敏である。『昇叙』『免職』『榮轉』

『失業』『豪奢』『貧窮』これ等は何たる皮肉な對象であらう、そうして其處には、歡喜や、悅樂と共に、痛ましい鬭争や沈倫、悲哀、慘劇が影の如く宿命の如くに伴ひ且現はれる、新聞や雜誌等は相も變らず人類鬭争の記事と多端雜復な變遷を煩錯に焦燥に報告する。

恁うした世相を眺めたとき、吾々は社會の如實相を、或は社會を組織すと人々の生活を、更には遂に自己そのものに就いての考察に歸るであらう。吾々が社會に生存する以上、現代に於ける吾々の生活そのものは、否定することの出

來ない、離れることの不可能な繫縛であると同時に、此社會に生活する自分自身を認めるとき現代吾人の生活と生活者自身なる所謂自我とは最も重要な關係であり問題である。

恁うした關係と問題とを有する此題下に於て貧弱な腦味噌を擽つて拙なき考察を試みようとする私は、もとより現代生活に對する經驗に若くは、思索に鈍きことを知れる以上、充分な考究に終らうとは元より期する所でない。故に今は此問題に對して、自分自からの感想を述べるべく此稿を草するのである。

元來、社會と自我の二者は常に不離の關係に置かれ時として、それは二而不異と云ふ哲學的考察に全く同一化せられすらして來たのである太古の時代から今日に至る幾久しき歴史も要す

るにこの社會對自我の問題に始まり、それを繼續しつつあるに過ぎないようにすら思はれるのである。宗數も哲學も詩も乃至は政治も産業も

諸有人間の所作萬般は、この社會對自我の生存に歸着するものではないのか、尠くとも此問題がその中心をなして居る事は競ふの餘地がない。そうして吾々の祖先は此問題の爲に煩悶もし、歡喜もし、苦痛をも感じ乍ら、或は之を忍び、憶病に勇敢に、懶怠に、粗暴に、殘忍に、親切氣に裝ひ振舞ひつゝ、そうした遺産を吾々に殘して、切迫した慰藉や安心や懊惱や憂愁やに取卷かれて自然の法則と共に此世を去つたのである、そうして今や吾々は、この遺された形見に無限の執着と愛を感じて、藻索し追窮し苦汗し、疲勞し、活動し靜坐し觀念し陶醉する自分等を見出すのである。

この偉大なる遺産をば覺者は慾の一字を以て吾々に敎示もし、體驗もせられた、實に自我對社會の執着は流轉してやまぬ無始無明の所産たる慾なるものであらう。そうしてこの慾の爲

に娑婆濁惡の世界を實現したらうことも首肯されるのである。

更らに、ウパニシャッドや佛典に説くアートマンや無我の思想は尊い一切萬象に對しての没我的超自我の對度そのものには云ひ知れぬ崇高の念を感じるし終局の理想のようでもある、實に無我寂靜に歸入し去れる聖者の内的生活を考へるとき佛陀としての人格は尊い。それは吾人小我を超越したる無爲涅槃安樂の境であらうけれども、憊うした佛陀無我寂靜涅槃の體驗も法有の説明となつたり、眞如恒存阿賴耶識の力説となつたりして遂には、大我の高潮となつて來て居る點よりするも、要するにそれは自我をしてかく觀せしめたものであり、個人我を全々否定視去れるが如くであつて實はその擴大であり自我思惟の轉換であり、その偏見、妄執に對しての否定であつた。

抑々佛陀無我の體認も、波羅門梵の思索も、自我の、やむにやまれぬ追窮とその發展ではないであらうか。

よし彼等が自我を全々否定し去つて空となすとするも、かく觀念する能觀それ自體を否定することは出来ないであらう、宛かも近代分析的科學的な理知が自我を『印象の束』と論結しようとも『生ける大理石』となし得ても彼等の自我分散者も實際上自我統一を確保して居るように、それは自我の追求であつたり、發展であつたりする以外に出でないように思はれる。

哲學的考察は別として、吾々日々の實觀によるならば吾々が他人を認めたり、金錢を弄んだり、又實際金錢が有用のものと考へたり、性慾や食慾等の本能のあることに氣付いたり、それ等の充されない爲に不満不平を懷いたり、戀の三角關係や四角關係に興味を持ち得る限り（凡夫として）自我の所有者たる事は確得されるのである、かゝる見解は低級な妄執であらうことは争はれぬかも知れぬが今は暫く風情に墮してこれを肯定して認識の對象としよう、完全をねがひ總てを包攝することを喜ぶ吾々は自我の認識に於て例外なく、之を量的に考ふるも一より

は多であり、多よりは總であることを理想とする、即ち一は多に含まるべきものであり、更に多は總の中に攝取せられて茲に多たるの意義を完うするように、眞の自我は自のみでなく、他をも包攝し結合し、統一せるものでなくてはならぬ。即それは總我であり全體我であることを究極とする。斯の如き考へ方からは個人我としての自我の意義は輕視さるべきものゝようでもあるが、然しこの自他統一の總我も結局は個人我の中に實現される所に意義を存するであらう實に自我は人類の支配者であり、世界の根據であり創造者である、こうした自我を有する人類はいつか知らず世界を事實支配し、山も川も生きとし生けるものは皆人類の爲に、その生活に役立つように、價值づけられるようにとつとめた、この目的の爲に人類は共同生活を營む便宜を感じ、やがては社會を建設した、社會の建設は要するに彼等の共同目的たる自我の存續であり、その發展向上にあつたに違ひない、彼等は各自の生存保持の爲に共勵し、外敵の防禦にも

つとめて義務のかたちにて於て社會の鞏固な團結と、種々な必要に應じての規約の組織に専らその繁榮を計つた、けれどもその目的とする處は自我にあつて、若し價值づけるならば各自の人格である、だのにいつしか人類はこれを忘れて自己を見ずして物を見、價值を人格に置かずして物を尊び出して、支配者の位置を顛倒さして專横な首長に己の自由を委ねたり、身動きも出来ない堅苦しい習慣や法則を後生大事に維持奉體したり理解もされない理論を築き上げて、支配の根據を失つたばかりでなく、身自からを奴隸にも潔よくした。

人類奴隸の歴史は過去に於ける顯著な事實であることを明にし、その大部分を占めさすに至つたことは人類の失敗と云はねばならぬ。

かくして人生の目的が他人の爲であつたり、金の爲であつたり、その他幾多の外的條件の爲であつて、直接自我の要求に應ずるものでなかつたことに堪へ難い苦痛と、惱みを強制されて來つた人類は時に宗教を發明したり、哲學を

究めたり、藝術に走つたりして、幾分たりとも自我を發見し進展せしめようとつとめたが、それも束の間何時しか亦それ等の奴隸と化し狂信者となり終つた、守銭奴として、學問の奴隸として、或は三寶の奴となつて勿體ない最後をいそいだものが如何に多かつたことであらう。現代とてもこの愚は繰返される、醫者に拂ふ金を勿體ながつて人生の目的を金を貯めることに置いて、その生を早めた人間もある。

先日の紙上(毎日夕刊)に或る十年來蝮の毒素を研究してゐる科學者某の妻女が蝮の毒を人間が呑んで、どんな作用を起すかを實驗するため、〇、〇三瓦嚙下した、血液中に注射すれば三時間で死亡する定量だそう、幸にして無事なる事を得たと云ふが、若し死んだらどうする、勿論科學研究の爲には生命厭ふに足らぬと云へば一言もないが、學問の研究の爲に他の人格を冒險することが間違ひでないとどうして云へよう、學問研究に忠實な科學者の勇氣と、夫の研究に對する犠牲的精神は賞讃に價ひするが、そ

の爲に人格を冒險することは、よしそれに學問的効果が伴つても確に人格の冒瀆であり、罪惡である云はねばならぬ、自我と對象とに於ける主客の顛倒である。

人間が自からの偏見によつて、外界の奴隸となつたことは淺墓であるが、それよりも社會の制度や習慣の爲に拘束され繫縛された生活は實に哀れてである。即これを西歐のそれにみるも、彼の封建制度や羅馬教會等の權威のもとに服従を強いられて、元來服従強制を厭ひ、自主獨立を悦ぶ天與を惠まれた人類が、長い中世期を通じてこの天惠による人間自然の性向は、罪なものの抑厭すべきものと一途に考へられて、時に會々な人間本來の自由精神の反抗的側面を哲學的思索や宗教々理の發達に、或は藝術の世界に微なか象徴を示さうとした劃はないでも、なかつたらうが、やがてはその哲學も宗教哲學と變じて終ひ徒らに教權をして鞏固ならしめる道具として役立たせられ、宗教はその本然の相をくらし、明るいヘレニズムの藝術は暗いヘブラヒ

ズムに壓倒破壊されて封建制度と教會專横の爲に、傳來の慣習や規約には忌憚なく服従するのが無條件に善なこと、見做されて不安な虐げられた中世期の渾沌は續いた。

然し彼の二世紀間にも亘つて數回に及んだ十字軍の遠征が、その遠征の度毎に宗教的假面の下に潜んだ、よからぬ手段の曝露や、聖墓保護のために遙々出征した貴き宗教的戰士の群も到る所で驚くべき不徳を行ふにいたつた始末や、遂にこの遠征が失敗に終つた結果は、やがて法王の權威の失墜となり、産業の變革や、封建制度の破壊などが急激に起り、一方コペルニクスの地動説を始めとして科學の進歩目覺ましく、ルネッサンスは次いで宗教改革を導くこと、なつた、又教會の奴婢であつた哲學は分離獨立を劃だて、自我の解放は茲に始めて漸次發展することゝなつたのである。

佛蘭西革命と、ゲーテの詩と、カントの哲學とを以て近世初頭に於ける自我解放運動の原理上の終結であるとも云はれてゐるが(フリードリ

ツヒ・シューゲル氏の評)彼の佛蘭西革命や北米の獨立等は實に大きな波動を世界に與へ、大天才詩人ゲーテを始め幾多の近世初頭に於ける詩人文豪や、大哲カントの出現等によつて、自我の醒めは明確な基礎を與へられた、久しい歲月の不自由な封建束縛の下にその服従を強いられた我國の人々も、明治の維新と共にこの解放の光に浴したのであつたその結果專横無爲の長夢にあつた佛徒が廢佛の憂目に遇つたのも當然なことである、恁うして自由解放の叫びは世界を風靡した。

恁うした思想の進展は、人性の自然を肯定し個人の自由意志は尊重せられることになり、遂に近代人にとつては、服従や義務と云ふ言葉さねが何となしに嫌惡な情を起し、反抗心を唆る傾向をすら生んだ、而してこの傾向は決して悦ぶべき方面へのみ向つては進まなかつた。

あらゆる外的束縛から去つて内的自我に導かれ、自由の上に立つと云ふことは吾々の理想ではあるが併しこの解放を遂行せしめる自由精神

が内省と更に積極的組織への努力でなかつたときに、一度解放された自我は、却つて空虚となり墮落して、遂には自我そのもの、分散破滅にあへない最後を遂げることとなるのであつた。

宗教に就いてこれを見るも、彼のルーテルやカルヴン等によつてなされた改革の叫びは近世自我解放運動中の最も光彩顯著なものとせられてゐるが、こうした宗教改革の運動は一面宗教の純化となり、即神人直接關係の恢復となり、信仰の内面化となつて、眞に宗教上に於ける成功を、おさめもしたらうけれども、他面には主理的な傾向が、科學的な理知として主宰し、自然研究に專注せられた結果は單なる原素的、分析的となつて宗教に於ける解放は、やがて宗教からの解放となり、遂には宗教の否定に終結する無神論となつたのである。

そうして人類が久しきに亘つて創造建設した精神文化の產物を冷やかな理知の科學的分解還元のメスを以て裁いた結果は遂に生存競争や適者生存等の自然法則と共に、淺ましい人間本能

の物欲的感覺的な人間の形骸を残すに至つて、茲に人類の社會をして現實暴露の悲哀修羅場と化せしめた。

かくして一度自我解放に悦んだ人類は此度は自我分散消滅の暗黒に陥らんとしたのである。

啻に宗教に於ける破滅を見たばかりでなく、引いては道德方面に於ても著るしく現はれ、刹那に變轉する衝動欲望に有りのまゝの人間性を無反省に見出さうとする耽樂主義、誤れる刹那主義、利己主義、現實主義の傾向は道德に於ける義務當爲は、單なる利己心、個人的氣隨がこれに代ること、なつて具の終結は道德に於ける解放は道德からの解放人倫の否定となつたのである。

ゾラやモーパッサン等に依つて表現された近代の文藝は如實にこの傾向を物語つてゐる。

然し一面かく迄も發展しはざらざらその原理的終結を見た自我の解放が實際社會に於て如何に具體化されたかは大いに注目し價する、解放された自我はその現實生活に於て職業の自由撰擇

と改善創造の自由を要求尊重することは當然である、それは各自の自我を中心として有價值とされる具體的方面は、即ち各自の生得せる特殊性がこれによつて最もよく活かされる如きものであるべき共通な傾向を有すべきだからである、元來吾々は各自に他と異別する特性を持つてゐる、この自然的個性が反省され、之をして普遍妥當的意義を有さしめる如き中心點が要求せられ、茲に理想的個性が現はれて完全な自我の具體的な發展がある、故に職業も各自の特性が充分に發揮されて、それが直に普遍者として活きて働くものでなければならぬ、其處では一の職業に於ける各自の部分が全體として現はさべきである、即ち職業は自我實現の重要な様式たるべきである、だから此意味に於て理想的職業は勞働も即ち悦樂となつて自我表現の活動を見る筈のものであらう、けれどもかゝる理想的職業がはたして如何なる程度に迄現代生活の上に實際化されつゝあるかは頗る疑問とする所である、現下大多數の就職業者は生活の手段としての

職業を強いられてゐるのではないであらうか、
 そうして遂には已自からを單なる手段として取
 扱ふこと、なり純乎たる手段化となつてゐる場
 合が多いように思はれる。

かくの如く職業に於ける自我實現も誠に至難
 事であつて、これは現代社會そのもの、罪とも
 見ねばならぬ、封建時代の社會が束縛強制であ
 つたとすれば、現代の資本主義的機械化の社會
 も、それは自我にとつての物件化奴隸化である
 眞に個人我をしてその自我表現を全からしめ職
 業を通じて社會我に連ならしめる理想のために
 は社會制度の改善進歩と、並に對社會に於ける
 各自の自覺に俟たねばならぬ、此意味に於いて
 實際問題としての自我の解放は今後も尙高叫さ
 るべきであらう、自由な自我の創造のない所に
 眞の人間生活は考へられないから、兎に角社會
 制度と吾々の生活の改善、職業に於ける自由撰
 擇、並に自我の象徴する職業上の悦樂が最も重
 大な意義を有する、職業上の悦樂は、自我の象
 徴表現としての職業への自覺によるものであつ

て、職業の神聖化がその根據となるであらう、
 既に考察し來つたように、中世の薄暗い幽閉か
 ら近世の明るみへ解放された自我が、はからず
 も自然科學の分析に遭遇して、自我自づからの
 崩壞に急いだ、即ち感覺、衝動等雜多なる方面
 への分散割據となつて、自我が悟性分析作用の
 組上に置かれたとき、自我は單に認識の對象と
 解せられて茲に已れ自からの没落の運命に陥り
 これが宗教や道德の價值實踐の上に迄推及され
 たとき眞に危險が生じた、夫れは必然に價值無
 差別觀に導いたことである、すべてを心理必然
 の所産と見るときに神人同交の感應も變態性慾
 も同様に高下の別が除かれ、又機械的必然の前
 には、道德的な懺悔や悔恨反省も放縱の自棄無
 反省と何等價值上の選擇は無意義とする歸結に
 到らうとしたことは、實に科學に於ける偏見の
 いたす所である。

もとより根本的にいへば價值の無差別は眞理
 といへる、關東大震災の當時焼け残された慘憺
 たる人々が一握の飯の半分の御禮に夫人が黃金

の指環を與へようとした事實や、同じ月をも眺めるを得ない盲人のなげき、月をも怨む失戀の若人、明月の宴に賞してやまぬ風流人など月そのものに固定した價值は存在しない、黄金は贅澤な裝飾品としては貴くもあらう、けれども線路として重い瀛車を走らす場合には鐵が絶大の價值を有する、同じ秋にしても物の哀れを感じるみやびやかな東洋人もあれば、萬果實る豐饒の氣節として賞せんとする利にたけた西洋人もある、秋そのものに變りはなからう、眺める者の相異で價值は動く、願生者にとつてこそ西方の淨土も至上の價值を有する、極樂そのものに絶對の價值はないといへる。

けれどもこれを以て直に、價值そのものを否定してはならない、それは理知の世界のみを見て情意の世界を没却せると同じ片輪な見方である。

・道德の方面に於いても、快樂論や、結果論や動機論が多くの缺關を有して、未だ道德價值の標準となし得ないとしても、之を以て直に自我

の行動のすべてを、自然必然の支配下に無差別に置かうとすることは早計であり、やがては自己の分散崩壊に、惡魔の專横に導くばかりである、無上價值は個性の自覺に基づく、吾々の自我はこの價值の世界に於て始めて、その成長を全うすることが出来る、自我の歩みは價值の世界に於てこそ安泰である、一度現代科學の外的分析に依つて、その尊嚴を消失し分散した自我は、必然的に、内面化(宗教的に)自律化(倫理的に)によつて、その失はれた地位を再びこの價值の世界に於て、恢復し自覺し、充實せしめて新たな努力にいでねばならぬ、自我の再建充實は價值の世界に於て劃てられ、それは美の世界への白道である。

そうして現代の生活と結びつけて考へるとき人は目的自體ではなくてなるべきである。茲に當爲は生れる、即吾々は生活の手段として物件として己自から取扱ふのではなくて當爲への努力である、恚うして自我が一定の方向をとる所に現實の生活は始まるこれは價值を中心とし

て自我が當爲に向つて全傾的活動を開始することである、當爲の中心に一切をあげて集注活動するのが個人々格の理想でもあらう。

この價值中心の當爲に向つての自我の活動は時間的には發展と云ふ形をとる、既に當爲である以上、その活動は刻々に實現されつゝ而も永遠に實現されつくされない底のものである、この當爲實踐の爲に自我は不斷なる精神努力の維持が要求される、けれどもこの精神努力も實現せらるべき當爲への發展であつて見れば當然これは將來に重點を置くことになつて現代の生活はすべて將來の爲の手段としてのみ存在することになる、功利厭世的な念佛行者が此世の生活を來世の爲の手段とする往生思想の様に現在其者としては意味が薄弱となる。然しこれは自我の優越を誇り、現實直下の刹那にも充實の意味を味はうとするものととつて堪われない所であつて、飽く迄現在に重點を置かうとする、此處に、現在中心の實體論傾向と未來中心の緣起論的立場が對立する、けれども實體論的考察も

緣起論的な證明も畢竟二而一、一而二の關係に歸せねばならぬと思ふ、而もこの對立は當爲に於ける發展概念の中に共に含まれてゐるべきものであつて、この兩者の合一は當爲實踐の中に於て行はれるものであらう、かくの如き意味での自我の實踐は如何にして可能であらうか。

個人我は追窮してやまぬ理知の活動を一方に有し又生滅起伏する表情等をも度外することは出來ぬこれら特殊雜多なる周邊的質料を内から統一して所謂個性を具へた人格の構成も要求せられるが要するに、自我は理想と現實との一致當爲と存在との歸一が理想として要求される、而して可能なるべき自我の實踐は自我の世界に於て始めて遂げ得られるのではあるまいか、眞の宗教はこの可能の鍵を握つて居るものゝように思はれる神人融合、絶對三昧の精進道が眞に自我の自由なる現實の充實を美に表現し同時に當爲淨土への跳躍であらう。

淨土の莊嚴は自我の絶わざる發展であり完成の美的表現であらう『宗教の世界は「永遠の現

在」を肯定するものであり、それは單な過去や未來に對しての現在ではなく過現未の三世を越えて之を内に含む現在である』とせられるから

である、かくて自我は單なる個人我ではなくて總我であり、大我であり、無我たり得るであらう。

インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理を施しています。